
高松支部国語部会

高松・山田中 渡瀬 健太

1 研究主題

(1) 研究主題

生きて働く力を育む国語教室～言葉による見方・考え方を働かせ、深まる学び～

(2) 研究主題設定の意図

令和の日本型教育の中で、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」ということが挙げられている。「個別最適な学び」は「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することの重要性が指摘されている。

教師が生徒に発問や指示を行い、それを受けて生徒が考えるという受け身の授業から脱却し、生徒が、国語科における付けたい力を明確に意識し、自らの学びを舵取りしながら、それぞれに合った学習を展開していけるような教師の働きかけが、これから求められる教師像の一つであると思ひ、研究主題を設定した。

2 研究内容

(1) 研究内容の実際

生徒が自らの学びの舵取りをできるようにするため、振り返りから行った。

・国語の授業を通して、どのような力が育成されていますか。

・50分の授業の内訳や、その中で教師が話をしている時間はどれくらいでしょうか。

・授業の目標は誰が立てていて、生徒の活動はどのようにスタートしていますか。

以上の3つの視点から、今までの授業を振り返ることで、教師による「おいしい素材を集め、それを調理し、盛り付けて生徒に提供するというレストラン型」の授業が

多いことが浮き彫りになった。これまでの公開授業では、教材を教師がどのように解釈し、それをどのように伝えたか、良い発問によって生徒の思考を刺激することができたかなど、授業での教師の発問や板書計画についての議論が多くなされているように思う。

ただ、このような授業ばかりになってしまうと、教師の発問がなければそれに気付かず、また教師の指示がなければペアやグループで話ができない、指示待ちの生徒が生まれてしまうことも容易に想像できる。

今の時代に求められている生徒像は、自分がつけるべき力をしっかりと自覚した上で、必要に応じて話し合いを行ったり、自ら調べたりと、自ら学びを舵取りする生徒である。そして、そのような生徒を育成するためには、「質の高いものを提供し、味わわせるレストラン型」の授業ではなく、「食材や環境を設定し、工夫できる空間を作るバーベキュー型の授業」であると考えられる。それを実現するにあたり、UDL(学びのユニバーサルデザイン)の考えを取り入れ、授業改善を行っている。

(2) 各部会について

生徒が多様であるため、生徒のニーズも多様になってくる。そこで、「スキルマップ部会」「学びの手引き部会」「交流でのスキル部会」「動画作成部会」「学びの振り返り部会」に分かれ、教材等を作成している。

①「スキルマップ部会」

昨年度の高松支部の研究部では、「話す・聞く」の授業作成の際、学習指導要領で示された「話す」ことを、教科書の言葉などを用いて表にした。その表を生徒と教師が共有することで、「話す」力が具体的にどのような力かを確認するとともに、本単元、本時での重点目標が何かを意識することができた。また、自分ができてないことに気付き、自ら目標を立

てることにもつながった。

今年度の研究部では、「話す・聞く」だけでなく、「書く」「読む」のスキルマップも作成し、国語科でどのような力を付けるのかを具体的に生徒に示すとともに、生徒自らが、自分に足りない力に気付き、それを高めることをねらっている。

②「学びの手引き部会」

文学的な文章や説明的な文章など、文章のジャンルによって、注目すべき点や読解の方法が変わってくる。教師はそれを把握し、流れに応じて発問をして考えさせたり、生徒に提示したりという授業は多い。しかしそれでは生徒自身が、読みにどのような段階があり、どのように学べばよいかも不明瞭となってしまったり、教師の指示がなければ動けなくなってしまうたりする。

「学びの手引き」では、読みの流れを記し、生徒自身が自分のペースで読みを深めることができるようになっていく。また、題材ごとに作成するのではなく、ジャンル別に作成するため、異なった文章でも同じジャンルであることに気付き、新しい文章でも自らの力で読めるようになることをねらっている。

③「交流でのスキル部会」

対話的な学習の視点での授業改善など、交流をする機会が増えている中で、話し合いによって課題が解決したり、考えが広がったりする体験が、次も話し合いをして解決してみようという協働の感覚を高めることにつながっている。そのためには、話し合いの質の高まりが求められる。そこで、話型や、聞き手の姿勢など、話し合いが円滑になるために必要なスキルを生徒に示すことで、コミュニケーションスキルなどの社会で必要とされる力の育成にもつながると考えている。

④「動画作成部会」

「個別最適な学び」での「学習の個性化」として、既習知識を振り返る場があるとよいと考えた。文学的な文章における語り手の存在や、情景描写の効果、また古文における歴史的仮名遣いの直し方や係り結びなどについて理解不十分な生徒がいた場合、それを見ることで内容を再確認できる動画を作成している。また、高松市の中で共有できるデータベースを作り、教師の負担軽減や共通事項の共有を図っている。

⑤「学びの振り返り部会」

自ら学習の目標やその力を付けるための方法を選択できるため、その選択によって学びが深まったのか、別の方法があったかなど、自分の学びを振り返り、学びを舵取りする生徒の育成や、生徒にとって必要なものは何かを教師がつかむためのきっかけとなることをねらっている。

3 今後の展望

社会の変化により、育成する力も変化している。一方でなかなか授業内容は対応しきれていないと感じている。だからこそ、高松支部の研究部員は今年度より、「個別最適な学び」を国語科で実現するためのUDLの実践をスタートし、授業改革を行っている。

今は、部会ごとに資料を作成して、実際に授業で活用することで、その成果や課題を探っている状態である。

各部会では話し合いを繰り返し、実際に授業で活用していく中で試行錯誤している。研究部員も、授業作りに主体的に取り組むことで、これからの国語の授業モデルを作っていきたいと考えている。